

平成29年11月30日

「この人に聞く」成熟社会と建築

新居 千秋（あらい・ちあき）氏

プロフィール 1948年島根県生まれ。  
建築家，(株)新居千秋都市建築設計代表  
取締役。現在東京都市大学客員教授。



1971年武蔵工業大学工学部建築学科卒業。1973年ペンシルバニア大学大学院芸術学部建築学科修了。1973年ルイス・I. カーン建築事務所。1974年G. L. C（ロンドン市テムズミード都市計画特別局）。1980年新居千秋都市建築設計を設立し現在に至る。その間，ペンシルバニア大学客員教授，東京都市大学教授，シンガポール国立大学外部卒業判定員等歴任。日本建築学会賞（作品）（黒部市国際文化センター／コラーレ，1996）を始め，日本建築学会賞（業績）（横浜赤レンガ倉庫，2004），日本建築大賞（大船渡市民文化会館・市立図書館／リアスホール，2010），日本建築家協会賞（由利本荘市文化交流館／カダーレ，2013），吉田五十八賞（水戸市立西部図書館，1993），村野藤吾賞（新潟市秋葉区文化会館，2016），WAN Concrete inArchitecture Award 最優秀（新潟市江南区文化会館，2015），アルカシア賞ゴールドメダル（黒部市国際文化センター／コラーレ，1996）など国内外で多数受賞。

（前文）

建築家新居千秋氏に，建築設計における信条や，魅力ある公共建築を実現させるプロセスについて伺った。

#### ■エンバイロメンタルデザインの視点と環境主義

この50年の間，大学時代及びアメリカ留学，イギリスのG.L.C（ロンドン市テムズミード都市計画特別局）や，AAschool\*に助教としていた期間に学んだことを含めて，自分が守ってきたことがあります。僕らが都市や建築を考える場合，それぞれバラバラにデザインするのではなく，すべてにつながりがあるという視点で様々なもののスケールを意識してデザインすることです。これは，アメリカ留学時代に学んだ，アーバンデザイン，アーキテクチャー，ランドスケープの三つを総合的に考えるエンバイロメンタルデザインという学問体系につながっています。さらに大きなスケールで考えると，ワールドワイドプランニング（世界のデザイン計画）と

して地球規模の環境保全といったものにも及んできます。

当時、経済至上主義から環境主義への転換について、多くの学識者によって様々な問題提起がなされました。現在でいう環境問題は、既にそれらの時代にまとめられたものが機械的な技術で裏付けされたものと僕は考えています。

この地球環境を考えると、すべての学問のベースになっている三つの項目があって、昆虫等の他の種に対しても人類には責任があるという自然生存権の問題、我々の子孫に負の遺産を残さずに、きれいな自然を残そうという世代間倫理の問題、それから、地球は有限であること。これらは世界の学問の基盤になっています。現実には、毎年日本列島の3分の1ぐらいの森林がなくなっている中で、僕らはそういうものを何とか留めることができないかと、建築をつくるときでも意識しながら取り組んでいます。また、環境主義への転換において、グローバリズムだけでやっていけないので、一つひとつの場所をそれぞれよく見て、その地域のあり方などを考えて建築をつくっていかないと、みんなジェネリックになるだろうと僕は考えています。内井昭蔵先生がよくお話されていた「建築家が頑張れば、町もみんな守れるんだよ」という言葉を念頭に建築をつくっています。

#### ■地域にたった一つの建築をつくる

僕らは37年前に事務所を設立して、これまで36の公共施設を手掛けています。建築の公共的責任を果たすべく、住民たちとどうつくり上げていけば、その地域の住民が自信を持ってくれて、近隣の人が憧れてくれるような建物になるかを僕は目指しています。一つの建物に5年程度じっくり取り組みますので、年に2個ぐらいのペースになります。こうした建物をつくることで、高齢化、少子化が進んで町がなくなってしまう状況に抵抗して、たとえ住民が少なくなっても頑張っていけるようにしたいと考えているわけです。

ただし、こうした建築の基本構想・基本計画は都市計画のコンサルタント、銀行系や証券会社系のコンサルティング会社などに決められ、建築家には任されていないのが実情です。僕らは決められた基本構想の中で基本設計をやらなくてはならない。そこには、地域を活性化するための地域住民との話し合いやニーズが反映されていないことやコスト面など様々な問題があるので、もっと民主的な手法ですごい建築がつかれないかと僕は考えて、住民参画によるワークショップをやって内容を変えながら何とかつくり上げていくことにしています。住民が参画するプロセスに懸念を持たれる地方公共団体の職員もいますが、“みんなで話せば結構仲よくなれ

”という僕の理論で、そのプロセス自体も文化を育てる意味で必要なことだと考えています。また、頑張っつつくっていくプロセスでみんなが元気になるというのも僕らの狙いです。

#### ■公共建築における複合文化施設の考え方

こうしたいくつもの取組みの中で試行錯誤してたどり着いたのが、リージョナル・インスティテューションとあって、僕らはその地域を活性化させる施設をつくらなくてはいけないということです。それには、1足す1が3以上になるシナジー効果を生むようなしかけが必要で、建物なら単館よりはなるべく複合化したものの方が効果的なので、その複合化のさせ方をみんなで考えるというのが僕らの一つの結論です。複合化したものはコスト的にも完成後の活性化を考える上でも重要です。

それから、アーキテクチャ・フォー・アロージング。みんながそこに入ったときに感動する、楽しくなるような場所をつくらなくてはいけない。これは、その地域に適したもので、その場所にしかないもの（ワン・アンド・オンリー）であること。その場所に対する特別な愛情（トポフィリア）を育むような、その場所だけに限定したもの（サイトスペシフィック）をつくる。そのために、ワークショップという手法を用いるのです。ただし、免罪符的に行われているようなものでは意味がないので、何度も回数を重ねていき、住民たちが自分でやったと感じられるのが重要だと考えています。

そして、ワークショップの段階で重要なことは、まずビジュアル系に考えること（イメージング）と、みんなの頭の中にもやもやしているものをビジュアル化すること（エマージング）から始めます。それから、単純に近代というだけでなく、今までその場所にあったような何かを引き継いだ未来（ノスタルジック・フューチャー）のイメージが重要だと考えています。そして、住民の意見を引っ張り出して拡大していく（エグザジャレーション）段階を経て、住民による「参加」ではなく、「参画」と言えるものになるのです。

そのとき建築家に必要なのは、住民たちと一緒にデザイン・スクリプトをつくることです。まず建築の形を先に決めないことがすごく重要であり、僕が考える建築家の職能は、コンティンジェンシー（偶然性）とか、リダンダンシー（冗長性）という、そのとき言われたことを柔軟に反応していくというものです。本来不均質である住民たちからの多種多様な発想を受け入れて、それらを頑張っつとめていくと、その人たちの心に残って誇りに思えるような、近代を超克できる物語を感じられるものがつくり

出せるのです。

#### ■住民から愛され続ける公共建築

まちづくりとの関わりとしては、事務所設立後、30年近く横浜市の裏方をやっていました。建物自体は建てさせてもらえませんでした。新本牧、港北ニュータウン、関内駅整備など、基本構想や計画立案などを手掛けてきました。今超高層のものができるのも、まちづくりの様々なスタディを横浜市としっかりとさせてもらったからだと思っています。そして、その結果として横浜赤レンガ倉庫を任せてもらえました。

前段の住民参画プロセスを主体とした手法は、この赤レンガ倉庫より前の1985年に世田谷区の梅ヶ丘中学校正門前ふれあい通りの整備からスタートしており、建築としては黒部市国際文化センター「カラーレ」が最初になります。

ワークショップの具体的な手法としては、僕らがプロポーザルなどで受かった後、その地域の住民たちにどんな食べ物がおいしいか、町のどこがいいですかなど意見を聞きます。それから、近隣の町の似たような建物を10〜20ほど見に行き、それで時間をかけてもよい場合は模型も住民たちとつくったりします。このプロセスで何が重要かという、「どんな建物が楽しいか」「どこで働いてみたいか」「自分は何が気に入らないか」というのを、住民たちと時間をかけてコミュニケーションを重ねて明確にしていくことです。そうすることを設計の各段階で繰り返していくことで、竣工後実際に自分たちが運営したらどうなるかを意識してもらうことができるのです。コスト面だけ考えると、建築の設計料がこういうことをカバーしていない日本の実情があるので難しいですが、住民参画型と言えるものにするには必要なことなのです。

世田谷区梅ヶ丘での道のプロジェクトや黒部市で大体確立した公共建築の手法をレジェンドとし、続いて大船渡市リアスホールと由利本荘市カダーレでも実践し、両者をこの手法の父と母と位置づけています。二つとも最初にこちらから提示したものは四角い建物でしたが、ワークショップを重ねて多種多様な住民たちの意見を吸収していった、現在の複雑で面白い形に至っています。こうして完成した建築であれば、決して押し付けられたものでない、住民が自分たちでつくり上げたものという意識が強く、住民に愛され続ける建築となるのです。それは現在の利用者数や賑わいが証明してくれています。今はさらにこの子供たちと言え、新潟市江南区文化会館、加茂野交流センターなどができていて、最近でも進行中のものが三つあります。

国内の公共建築に対する評価は、すし屋に例えると回転ずしのチェーン店みたいに大きな組織設計事務所や、最近の建物を評価するという傾向がありますが、10年、20年といった、長い期間を評価するという観点に欠けています。そういった観点からみると、人気のあるすし屋で予約の取れない良質な老舗のように、小さな事務所でも長く皆に愛される建築をつくり続けているところもありますが、そういうところは評価されません。長く保って、ずっと使えて、その地域や住民を元気にしていく建築に目を向けていただきたいと思います。